

説教ではなく語りを

お祭りに行くときはね、大金を持っていかないで、少しにするのよ。
財布はしっかりと管理してね。

と、このように「何らかの行為を禁止し、命じること」を説教といいます。

教師は、人からの指摘（説教）をたいへん嫌う人種でありながら、子どもへの説教は大好きです。
暇さえあれば、説教して何かを教えようとします。

しかし、その効果の方はというとほとんどないと言っていいのです。

子どもは抑圧されたと感じ、命じられたと感じ、守らされてると感じるのです。

だから、教師が説教を始めると、「またか」という顔をするのです。

先生が小学校三年生の時の話です。

近くの神社で6月にお祭りがあったのです。

先生はおじいちゃんとおばあちゃんからお小遣いを、千円もらって有頂天でした。

お母さんが、落としたら困るから半分だけ持って行きなさいといったのもきかずに、ポケットに全部ねじり込みました。

財布にも入れないでね。

先生は、走って神社の境内の出店にいきました。

そして、金魚すくいの水槽の前に汗を拭きながら座ると、「おじさん一回、お願い」といいました。

おじさんは、「はいよ！100円だよ」といいました。

先生は、ポケットに手を突っ込みました。

そのとき、血の気が引きました。

どのポケットを探ってみても、あるはずの千円がないのです。

先生は、あわてて金魚すくいの網を返すと、いまきた道を下を向きながら戻りました。

ところが、千円はとうとうなかったのです。

先生の頭の中には、「半分にしなさい」というお母さんお言葉が巡っていました。

そして、もし財布に入れておけばとも思いました。

先生は、その年お祭りで何もせず、何も買わずに我慢しなければいけませんでした。

このように、教師の知見・体験に支えられたエピソードを、場面を描写しながら話すことを「語り」といいます。

「説教」と「語り」には、聞いている子どもの側の意識に雲泥の差があります。

「説教」には、抑圧、命令、義務という印象を持ちますが、「語り」には、共感と守ろうとする意欲が生まれます。

ぜひお試しを。